

人と自然、そして文化が繋ぐ未来
～タスマニア派遣事業を通じて広がった私の世界～

大手前丸亀高等学校
普通科 2 年 北あいる

香川銀行タスマニア派遣事業の一員として、日本とは気候も風土も大きく異なる南半球の島であるタスマニアで私は単に英語力を磨くためだけでなく、現地の人々と深く関わり、日本の文化を伝えるとともに、現地の社会や環境に対する取り組みを学んだ。

タスマニアでのプログラムのなかで、私たちはホバート・タウンホールを訪れ、市長にお会いするという大変貴重な機会をいただいた。その際、市長さんから直接お聞きした言葉が、私の心に深く突き刺さった。それは、「このタスマニアの豊かな自然を、今もなお守り続けられているのは、高度な最先端の機械や厳しい罰則によるものではなく、ここに暮らす『人間の力』そのものがあるからだ」という言葉だった。オーストラリア、そしてタスマニア州は非常に多くの移民を受け入れている多様性に満ちた社会である。生まれ育った文化的背景も、使用する言語も、価値観や習慣も全く異なる多様な人々が同じ街で暮らしている。日本のように「言わなくても分かり合える」という前提がない国において、全員が足並みを揃え、一つの大きな目標である「環境保護」に向かって行動し続けることは、容易なことではないはずだ。それにもかかわらず、街全体がきれいに整備され、固有の生態系が守られている背景には、市民一人ひとりの行動を支える「教育」と、『ランドケア (landcare)』と呼ばれる市民主導の環境活動があった。これは専門家だけでなく、地元の小学生から一般市民までがボランティアとして気軽に参加し、固有種の植樹や外来種の駆除を日常的に行うものである。こうした活動への参加が当たり前の日常として根付いている仕組みがあることを知った。環境保護は厳しい法律、罰則なしでも成り立つものなんだということにとっても驚かされ、日本でもこのような価値観、考え方を広めるべきだと強く感じた。

また、私たちは現地の学生たちに対し、日本、そして香川県ならではの文化を披露し、相互理解を深める活動を行った。私が担当したのは、「ラジオ体操」と、「食文化」の紹介である。ラジオ体操の披露では、音楽が流れ始めると、最初は不思議そうな顔をしていた小学生たちも、私たちの動きを見真似しながら次第に笑顔で体とともに動かした。言葉による細かい説明がなくても、同じリズムに合わせて体を動かすだけで、一瞬にして心の距離が縮まるのを肌で感じることもできた。また、食文化の交流として実施した「うどんクッキング」のアクティビティでは、現地の生徒約 15 名とともに、香川の伝統的なうどん作りの魅力を伝えた。自分たちの地元の食文化を美味しいと言って食べてもらえる喜びを感じ、文化の発信が国境を越えた強い絆を生むのだと実感した。

この派遣事業において、最も幸せな時間を過ごすことができたのは、温かく迎え入れてくれたホストファミリーとの出会いがあったからだ。滞在前は「自分の英語が本当に通じる

だろうか」という不安が大きかったが、実際に生活が始まると、その心配はすぐに吹き飛んだ。ホストファミリー全員が非常に親切で、私の拙い英語に対しても熱心に耳を傾けてくれた。現地での会話は、私にとってこれまでにないほど新鮮で楽しいものだった。日本人とは異なり、タスマニアの人々は非常にオーバーなリアクションで感情を表現し、常にポジティブで明るい雰囲気にしてくれた。私が何か一つのことを話すたびに、体全体で表現してくれたりするその姿は、私自身の緊張をほぐし、「もっと英語で喋りたい」というモチベーションを最大限に引き出してくれた。リビングで家族全員と囲んだ食卓、日常の何気ない冗談で笑い合った時間は、私にとってかけがえのない記憶となった。言葉の壁を越えて、心と心で繋がり合える楽しさを知ったことは、私のコミュニケーションに対する姿勢を大きく変えるきっかけとなった。

今回のタスマニア派遣事業は、自然の豊かさに感動するだけでなく、それを守る多様な人々、さらに世界には、自分がまだ知らない多様な生き方や、温かい人々、そして美しい景色がたくさん存在しているということを学ばせてくれた。この経験を通じて得た「英語で伝える楽しさ」と「人と環境が共生する仕組み」を、一時の思い出にせず、自らの学校生活や地域社会に活かそうと思っている。

最後に、このような素晴らしい学びの機会をくださり、私を支えてくださった香川銀行青少年育成支援財団の皆様、現地でお世話になった先生方、ホバート・カレッジの友人たち、そして何より私を家族のように愛してくれたホストファミリーに、心から感謝します。



8月8日 ホームスティ先の家にて